大阪府公衆衛生チーム
１０班活動報告

派遣期間　令和6年2月1日（木）～2月6日（火）

【班員】
豊中市　前川（保健師）
豊中市　古谷（獣医師）
大阪府　小川（保健師）
大阪府　北村（行政）

令和６年能登半島地震による被害等の状況について

１　地震概要

（１）発生時刻 令和６年１月１日１６時１０分頃

（２）震源地 石川県能登地方（震源の深さ ごく浅い）

（３）地震の規模 マグニチュード７.６（最大）

（４）石川県内の震度

【震度】

・震度７： 志賀町、**輪島市**

・震度６強： 七尾市、珠洲市、穴水町、能登町

・震度６弱： 中能登町

・震度５強： 金沢市、小松市、加賀市、
羽咋市、かほく市、能美市、宝達志水町

２　輪島市内の被害状況（令和６年２月２日時点）

・死者：**103**名（うち災害関連死**3**名）　・負傷者；**619**名

・住宅被害：**2,606**棟

・断水：約**10,000**戸（ほぼ全域）　・電力：約１,２**00**戸停電

・ 避難所数

➢市町１次避難所；開設**87**か所、避難者数：**2,685**人（※縮小傾向）

輪島の朝市（２/３時点）

〇医療に関する支援活動

保健師：県内外から多数の保健師を被災市町や県保健福祉センター、１．５次避難所に派遣
在宅避難者に対しても、体制の整った地区から順次、保健師による訪問活動を実施

大阪府公衆衛生チーム10班の活動

〇輪島市保健医療福祉調整本部　保健師派遣チームで活動

【全体目標】

輪島市民の健康を守る

【チーム目標】

輪島市の要支援者の把握

①在宅要支援者の健康管理

②避難所の要支援者の健康管理

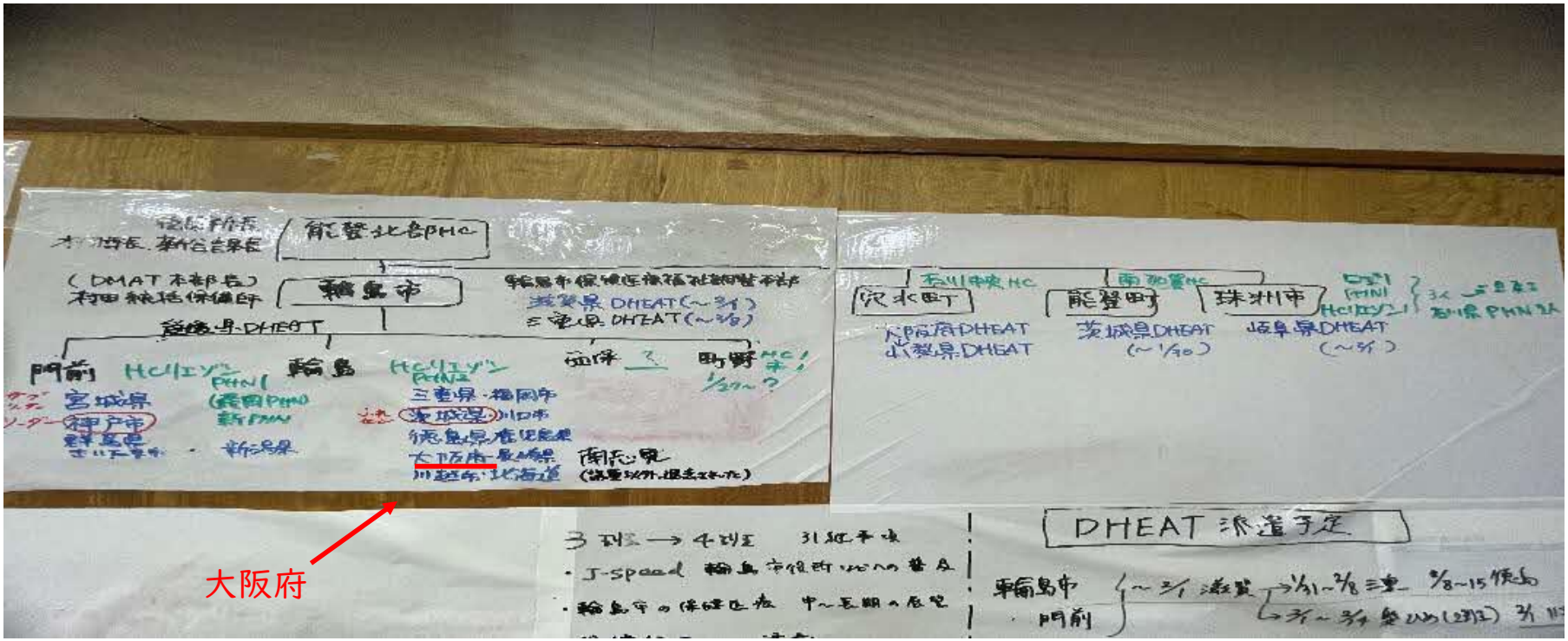
大阪府公衆衛生チーム10班は
輪島市内の中でも【三井地区】を担当
避難所や個別訪問により、健康管理、要支援者の把握を実施

【位置関係】

組織体制

・石川県能登北部保健福祉センター（能登北部保健所）で活動
・能登北部保健所は「輪島市」「穴水町」「能登町」「珠洲市」を管轄
・「輪島市」内でも門前、輪島、西保、町野に分かれ、各自治体が業務を分担
・大阪府は輪島に入り、業務を担当

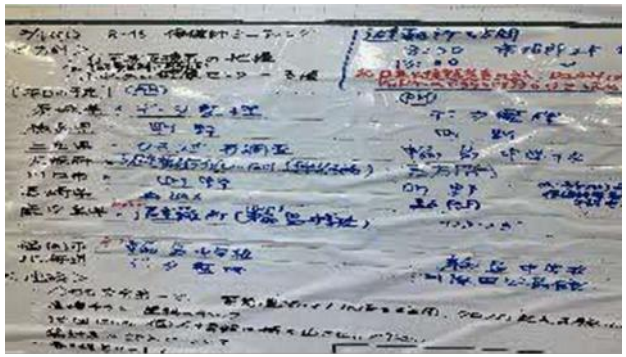
【組織図】



石川県能登北部保健福祉センター（能登北部保健所）

・輪島市保健師派遣の活動拠点
・指揮系統
　➢２月５日時点では、**DMAT**、三重県**DHEAT**が指揮。２月５日に**DMAT**はロジのみ継続し、その他は撤退
　➢２月６日以降は、神戸市保健衛生チームが三重県**DHEAT**から引継ぎを受け、２月８日以降は神戸市が単独指揮予定
・活動内容
　➢**AM８:45**、**PM４:00**から保健師ミーティング（当日の予定確認、報告会等）を実施
　➢各自治体の要支援者や避難所情報等の報告により、今後の計画を決定

【活動の様子】



朝にはラジオ体操も！

１０班活動①　坂田集会所

・２月４日時点で、５人の避難者が生活（１名は食事のみ）
・座布団を敷いて寝床としている。また仮設トイレがなく、夜間のトイレが困難
・血圧が高いが、血圧を下げる薬が無くなっている避難者がいる。薬を処方してもらいたいが、かかりつけクリニックも被災してる等で、薬の受け取りが難しい

【活動の様子】

１０班活動②　三井基幹集落センター（三井公民館）

・三井地区の指定避難所であり、２月３日時点で２７名が避難している
・他の避難所が閉鎖し、行先のない避難者を受け入れている
・自衛隊等の炊き出しや物資の配給の拠点となっており、三井地区内から多くの被災者が訪れる
・金沢に避難している等の三井地区の被災者の動きの把握に取り組んでおり、詳しいキーパーソンがいる

【活動の様子】

１０班活動③　しいたけハウス（石川JDATと同行）

・元々しいたけを栽培していたビニールハウスを避難所として利用しており、室内は土足
・現在も１０人程度が利用。食事については、朝昼は配給物等を各自で食べ、夜だけ炊き出しで栄養を摂取している
・寝床の多くが農業用のかごや肥料を積み上げた上に敷布団を敷いて、ベッドとしている
・トイレは「ラップポントイレ」を使用。自動処理のタイプのトイレを設置していたので衛生的
・更衣室も設置されており、プライバシーにも配慮されていた
・避難所を利用していた若い人が、現在では電気が通ったこと等で、避難所から離れてしまい、残された高齢者に負担がかかっている
・空気環境測定を実施したが、一酸化炭素等の濃度は問題なし
　➢過去、練炭を使用して一酸化炭素等の濃度が高くなり、環境衛生監視員の指導があったため、その介入は効果的であったといえる

【活動の様子】

Ｉ０班活動④　三井町ヤクルト避難所（石川JDATと同行）

・大きな倉庫を避難所として利用している
・トイレは、向かいのサロンのトイレを使用。ただ、トイレは浄化槽のため、トイレットペーパーは流せず、集約して可燃ごみで捨てている
・食事面は、朝昼は配給物等で過ごし、夜は自衛隊の炊き出しで栄養を摂取している
・避難所の利用は主に食事のみ。避難者は、自宅、車中泊、被災状況が軽度の近隣宅等を寝床にしている
・DMAT等が入り指導が入ったおかげで、流水による手洗いの感染対策の意識が向上していた
・空気環境測定を実施したが、一酸化炭素等の濃度は問題なし

【活動の様子】

１０班活動⑤　仏照寺・徳成寺避難所

・現在22人が利用しているが、寝床にはしておらず、食事をするときだけ避難所を利用している
・寝泊りは、電気が通ったため自宅か、車中泊をしている
・体調不良者なし、電気も通ったことにより、自宅生活ができる方が多いため、解散となった
・２月４日に避難所閉鎖後、車中泊をしている人の一部は三井公民館に移動予定

【活動の様子】

１０班活動⑥　内屋避難所

・現在14人が避難、食事は配給物資や自分たちで自炊している。栄養状態は良好
・体調不良者はおらず、電気が復旧したことにより日中は自宅の片づけに行っている人が多い
・避難所の運営は避難者で輪番でまわしており、自主運営が確立していた
・地元のクリニックの看護師も避難しており、ほかの避難者の処方薬の確保ができていた
・施設の中にトイレがあり、使用できていた。空気環境も問題なく、前回巡回時より改善されていた

【活動の様子】

１０班活動⑦　個別宅訪問

・把握していない被災者の自宅に訪問し、避難状況や健康観察を実施
・倒壊の恐れがある危険な建物も多く、自宅におらず金沢等に避難している人も多かった
・日ごろから付き合いがあるからか、近隣住民に避難状況を確認することもあり、普段のつながりが地域の防災力を高めている
・４日間の輪島での活動で、計１7件の個別訪問を実施

【活動の様子】

支援活動でみえた課題等①

○被災者の生活環境の変化への対応

・支援期間の４日間だけでも、ライフラインの復旧、自主避難所の閉鎖など、生活環境が日々変化する。自宅へ戻った後の生活状況、健康状態の把握など、また別の保健活動のニーズが出てくる

・今後、仮設住宅への住み替えなど、生活環境は向上するが、これまで馴染んできたコミュニティを離れることによる精神的ストレスなども考えられるため、集落ごとの仮設住宅の設置など、地域集団を考慮した復旧支援が必要と考える

・一方で、山間部など生活環境をなかなか改善できない避難所もあり、長期の避難生活による二次被害への対応は長期的課題として対応すべきである

○被災地での保健活動

・健康面の把握や保健指導については、保健師でも可能だが、空気環境測定など衛生環境の整備については環境衛生監視員の介入など、多職種によるアプローチが非常に効果的である

・今は「元気」と答えている被災者も、支援者が撤退などでいなくなることに対し「寂しい」と感じており、そのことによる、被災者のメンタルへの配慮も必要である

・**JDAT**との同行訪問を実施したが、それぞれの役割をお互いに認識し、活動する必要があった。また、歯科医が避難所を巡回するというメリットを最大限に活用するため、一般的な口腔ケアの指導だけではなく、診療の必要性の判断や簡単な処置に至るまでの支援をしてもらえるような連携ができればなおよかったと思う

支援活動でみえた課題等②

〇被災地との連携

・地域のかかりつけ医が少ないことも課題である。地域の医療を支えている医療機関が少ないことで被災時に対応できず、薬の確保ができていない。オンライン診療など、遠隔地にいても地域住民の医療を支える体制を平時から構築しておくことが重要であると感じた

・また、被災という特殊な状況の中では処方薬の確保すらスムーズにいかず、様々な部署を経て調整する必要があった。支援者が直接、医療班に相談できる仕組みなどがあれば、シームレスに個別フォローできたと考える

・支援活動の中で継続支援が必要なケースも把握され、現地の保健師や地域包括支援センターに余力がないため、ケースの引継ぎができなかった。被災地支援の後、いかに途切れさせることなく、確実に支援を引き継げるよう配慮が必要である

・要支援者（障害者など）の家族はサービスを利用できない（事業所も被災）ために、家族にかかる負担は急激に大きくなる。本人だけではなく、家族も災害弱者となるという意識が必要である

・市職員も被災し疲弊する中で、伝聞情報に齟齬が生じる場面があった。何の情報を・誰が・どこに対して発信する情報なのか、都度ログを残しておかなければ最新情報の更新や、履歴の確認などすらままならない状態での活動が続いた。情報の統制がいかに重要であるかを経験する良い機会であった